（別添４）

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
農産部門

条件不利を克服した高収量大豆生産と水稲の安定・高品質生産

○氏名又は名称　阿部　真一

○所　　在　　地　新潟県長岡市

○出　　品　　財　経営（大豆）

○受　賞　理　由

・地域の概要

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置し、水稲の生産を中心とした、県内でも有数の「コシヒカリ」産地である。

戦略作物としては、ブロックローテーションの実施を背景に、大豆の生産が多く、県内の主産地となっている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

阿部氏は、家族経営で大豆＋水稲の土地利用型農業を営んでおり、平成26年度の作付面積は、大豆6.2ha・水稲5.7haの計11.9haである。

大豆については、集落内でブロックローテーションによる団地化が進められており、阿部氏はその大豆生産を一手に引き受けている。

・受賞者の特色

（１）条件不利地域を克服した高い収量性の大豆

本地域は排水性が悪く大豆栽培に適しているとはいえない地域であるが、耕耘同時畝立て播種の導入、弾丸暗きょや明きょの完全施工等による排水対策の徹底等により、全国・新潟県の平均単収を大きく上回る収量を安定的に維持している。

（２）食味・品質において高い評価を受ける水稲

もう一方の経営の柱である水稲についても、ＪＡ越後ながおか主催の「こめの匠コンテスト」で初代“匠”に認定されているほか、全面積で特別栽培に取り組んでおり、その技術力と食味・品質は高い評価を得ている。

・普及性と今後の発展方向

「きめ細やかな管理と基本技術の徹底」の確実な実践を踏まえ、新技術導入による省力化・低コスト化も組み込んで、安定した高収量と高品質を実現している阿部氏の営農体系はモデル性がある。

また、大豆作付ほ場の団地化とブロックローテーションの実施に当たって、阿部氏の誠実な人柄と高い技術力などは、地区内の合意形成を円滑にしてきた。

阿部氏は、今後も集落の大豆生産を一手に担うとともに、水稲部門においても、離農に伴う農地の受け皿となることに意欲を見せるなど、今後も地域水田農業を支えていく方針であり、かつ、その高い技術力と農業・人に対する誠実な取組姿勢の伝承が期待されている。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
園芸部門

地域農業を下支えする多角的な経営展開、新たな農村活性化の方向性の提示

○氏名又は名称　有限会社　シュシュ（代表　山口　成美）

○所　　在　　地　長崎県大村市

○出　　品　　財　経営（ぶどう他）

○受　賞　理　由

・地域の概要

大村市は、長崎県本土のほぼ中央部にあり、海洋性気候のため温暖で過ごしやすい気候となっている。シュシュがある福重地区は、大村市北部に位置し、日本なし、ぶどう、野菜等が生産される農業が盛んな地域で、「フルーツの里ふくしげ」と呼ばれている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

大産地ではないものの多品目が生産される地域特性を活かし、６次産業の確立と農業後継者の育成を目的に、平成10年に農家８戸が有限会社かりんとう(のちのシュシュ)を設立した。シュシュでは、①農産物直売所「新鮮組」の運営、②農産物の加工・販売、③レストラン運営、④食育・農業体験、⑤農業塾、⑥グリーン・ツーリズムのコーディネート、⑦農産物の生産等、地域農業を下支えする多角的な経営が展開されている。

・受賞者の特色

（１）経営の特色

① 生産者、販売者、消費者の距離感が最も近い直売所を目標に掲げ、あらかじめ栽培品目や出荷量等を協議することで、果物、野菜、花き、牛肉等の約250種類以上の商品を、年間を通じて出荷・販売できる体制が確立されており、農家の所得向上に貢献している。また、果物については、必ず試食販売を行うこととしており、農家が消費者の評価とニーズを真摯に受け止め、安売り競争にならないよう、個々の生産技術の向上につなげている。

② 農産物直売所に加え、アイス工房、パン工房、ぶどう畑のれすとらん、いちご収穫体験施設を併設し、団塊の世代を対象とした農業塾や収穫体験と連携した婚活事業等を行うなど、地域の資源を活用した農村地域の新たな活性化の方向を示す地域おこしの拠点となっている。

（２）技術の特色

観光農園で栽培している日本なし・ぶどうについては、食べやすさ等消費者のニーズに対応した品種を導入するとともに、栽培履歴のチェックや出荷前の目揃いを行うことで高品質果実を提供している。また、民間企業と連携した加工品の開発等を行っている。

３．普及性と今後の発展方向

本取組は農村地域の新たな活性化の方向性を示すものであり、今後は、農家の高齢化に対応した集出荷体制の構築や労力不足に対する短期的支援体制の検討を行うことで、農家が農業だけで生活ができるように支援を進めていくこととしている。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
畜産部門

女性の活躍による商品価値の高い子牛生産

○氏名又は名称　かあちゃんべぶんこ会（代表　立迫　眞由美）

○所　　在　　地　鹿児島県志布志市

○出　　品　　財　生活（生活改善）

○受　賞　理　由

・地域の概要

志布志市は鹿児島県東部、大隅半島の付け根に位置する。一年を通じて温暖な気候で、全国有数のお茶の産地であり、大根、キャベツ等の露地野菜、焼酎原料のサツマイモ等の栽培も盛んである。また、会が活動する曽於地域は黒毛和種子牛生産の日本一の産地である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

かあちゃんべぶんこ会は、黒毛和種繁殖農家の女性就農者の会である。平成16年に地区畜産共進会の「女性審査競技会」に参加し入賞したのをきっかけに地域の畜産女性が設立した。会では鹿児島県推奨の「子牛育成マニュアル」の実践と毎月の勉強会を行った結果、育成子牛の体重の増加、出荷日齢の早期化など商品価値の高い子牛生産が可能となり、女性の経営における発言力向上や自立につながっている。さらに、県内の畜産・農業の女性のネットワークを広げ、畜産・農業女性生産者の精神面での支援活動も積極的に行っている。会員数は現在９名。

・受賞者の特色

（１）子牛・繁殖牛の飼養管理技術向上

本会では「子牛育成マニュアル」の実践と毎月の勉強会の結果、育成子牛の体重の増加、出荷日齢の早期化など商品価値の高い子牛生産が可能となった。

（２）畜産分野における女性の地位向上

子牛販売の実績などから、飼養管理等について外部から多くの問い合わせがあり、その活動が注目されている。また、新しい技術についても取り組み、その結果を地域に波及させるなど、女性の活躍が評価されている。

（３）女性リーダーとしての活躍

会員は女性農業経営士として認定されている。また、女性リーダーとして若手女性農業者に対する精神面での支援活動も積極的に行っている。

（４）経営の健全化

会員は青色申告を行い、簿記記録方法を学び複式簿記で記帳などを行っているほか、家族経営協定を締結し、経営者として積極的に経営に参画している。これにより精神面でゆとりある経営が営まれている。

・普及性と今後の発展方向

「子牛育成マニュアル」の実践と学習による飼養管理技術向上から子牛販売成績が向上し、さらに、新しい技術についても取り組み、その結果を地域に普及している。また、飼養技術の向上から畜産分野のおける女性の地位向上や女性ネットワークの拡大にも尽力し、男女共同経営の進展から、業界全体の発展に貢献するものである。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
蚕糸・地域特産部門

特徴ある蚕品種「プラチナボーイ」で、川上と川下が一体となった純国産絹製品づくり

○氏名又は名称　“絹を未来に”プラチナボーイ研究会（代表　木下　幸太郎）

○所　　在　　地　東京都中央区

○出　　品　　財　経営（生糸・絹織物）

○受　賞　理　由

・地域の概要

“絹を未来に”プラチナボーイ研究会は、特徴ある蚕品種「プラチナボーイ」を使った「モノ」づくりに取り組む、東京都日本橋人形町の絹織物流通業者を代表として、茨城県及び千葉県の養蚕農家、群馬県の製糸業者、京都府及び新潟県の織物・流通業者、東京都銀座の販売店から構成されている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

平成17年に開発された雄のみが生まれる特徴を持つ蚕品種「プラチナボーイ」を使用し、川上（養蚕・製糸業）と川下（染織・流通・販売業）が一体となって、原料の繭生産から糸繰り、染色、織りまで一貫した純国産絹製品づくりと販売に取り組んでいる。

・受賞者の特色

（１）　良い繭づくりから良い製品づくりまで

原糸の原料となる繭「プラチナボーイ」は、卓越した飼育技術を持つ養蚕農家によって生産されており、この原料段階から最終製品に至る各工程関係者の名前を表示して、顔の見える製品づくりを行っている。

また、技術の維持・向上を図るため、各工程関係者がより良い「モノ」づくりを行うという意識を持つことで、良い繭、良い生糸、良い染色・製織づくりにつなげ、より良い最終絹製品が消費者に届けられており、消費者からも「プラチナボーイ」に対しては、「軽くてシワになりにくく光沢が抜群」と高い評価を得ている。

（２）　草木染めと学習活動

プラチナボーイ研究会は、製品販売の拠点となる銀座の街路樹である柳の剪定された枝葉を活用し、鹿児島県奄美地方の泥とともに草木染めの原料としている。

また、製品販売と併せて蚕の飼育展示を行い、着物を着用する顧客に対して生きている蚕を見せるほか、地元小学校において蚕の飼育学習や草木染めの実演指導を始め、子供達への学習活動に協力している。

・普及性と今後の発展方向

プラチナボーイ研究会は、商品製作10周年記念の作品発表会を平成２７年３月に開催した折、『自分で蚕を飼育し、収穫した「プラチナボーイ」の繭を使用し、自らの企画で製作した着物』という消費者参加型の取組（プラチナボーイ物語）を発表し、顧客の興味を喚起している。

今後は、ロンドンとパリに出店を検討しており、現地在住の日本人に着物の良さやシルクについて再認識してもらう機会になると考えている。また、ロンドン、パリの人達にも着物のアート性を強調した販売戦略をとることとしており、世界に進出する第一歩となることが期待される。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
林産部門

高密度路網と機械化による低コスト化と人づくりを重視した林業経営

○氏名又は名称　永田　晶三

○所　　在　　地　奈良県吉野郡下市町

○出　　品　　財　経営（林業経営）

○受　賞　理　由

・地域の概要

永田氏の経営する森林の主たる所在地である天川村は、奈良県のほぼ南半分を占める吉野郡の中央部、吉野山地の中心に位置している。「近畿の屋根」とされる大峯山系が本村の東部に連なり、西端は天ノ川の流出口になっている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

急峻な地形に対応した 146m/ha に及ぶ作業道を平成４年から計画的に開設し、奈良県で最も早くハーベスタを導入するなど、低コスト化を積極的に進めるとともに、優良材生産に向けて長伐期施業（原則 100 年生以上で伐採）を基本とし、早期枝打ち、頻度の高い間伐を行っている。また、若手林業従事者の育成や架線技術の伝承に取り組み、周辺の森林所有者と連携して森林経営計画を積極的に策定する等、林業経営の牽引役として大きな役割を果たしている。

・受賞者の特色

（１）低コスト化と技術の伝承の両立

急峻な地形に対応した作業道の整備と林業機械の導入に架線集材を組み合わせることにより、省力化、低コスト化に取り組むとともに人材育成と技術の伝承を行なっている。

（２）高品質な吉野材の生産

伝統的な吉野林業の特徴である長伐期施業を基本とし、早期枝打ちを行い、弱度の間伐を繰り返すことで公益的機能の維持・増進を図りつつ、高品質で優良な吉野材を生産している。

（３）地域に根ざした森林・林業

周辺の森林所有者と連携して森林経営計画を作成し、施業の集約化を促すなど、林業経営の牽引役として大きな役割を果たしている。

・普及性と今後の発展方向

「人づくり」を重視し、職場づくりに取り組み若い林業技術者を確保・育成するとともに、技術の継承を継続的に実施している。また、自己所有山林周辺の森林所有者と連携して森林経営計画を積極的に作成するなど、地域の林業経営の牽引役となっている。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
水産部門

育て！エゾバイツブ～エゾバイ増殖にかけた漁師～

○氏名又は名称　広尾漁業協同組合　エゾバイツブ篭漁業部会（代表　関下　啓史郎）

○所　在　地　北海道広尾郡広尾町

○出　品　財　経営（資源管理・資源増殖）

○受 賞 理 由

・地域の概要

広尾町は、北海道十勝管内の最南端に位置し、東は太平洋、西は日高山脈に面しており、豊かな自然を生かした漁業と酪農業が基幹産業となっている。主な漁業はサケ定置網漁業を主幹としてイカ釣漁業、沖合底びき網漁業の３漁業種類で総水揚金額37億円の約60％を占めている他、マイワシまき網漁業、沖ツブ篭（かご）漁業、ケガニ篭漁業、シシャモこぎ網漁業が行われている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

広尾漁業協同組合エゾバイツブ篭漁業部会は、平成元年に13名で発足され、その後、高齢化等もあり、現在は８名の体制となっている。

未利用資源だったエゾバイツブは、漁獲量は多いものの単価が安く漁獲量で収入をカバーしていたため、漁獲量は急激に減少し、部会員の所得も大幅に減少した。

このため、部会独自で一定の資源管理対策を講じようとしたが、エゾバイツブの生態特性が不明だったため期待された効果が得られなかった。しかしながら、粘り強く部会内で協議を続け、資源悪化による危機的な経営環境等にあることを全員で共有した上で、部会の共同経営化・資源対策において水産試験場と連携し対応する等の安定化に向けた取組を行っている。

・受賞者の特色

（１）操業の合理化

共同経営の実現により、従来の過当競争をベースとした操業から、協力・連携による適切な操業に転換できたことが大きな成果である。共同経営によるプール制の導入によって、水揚金額の均等配分、燃油及び餌料経費を均等負担、さらにカゴ数・出荷規格の統一等一丸で実施する経営形態とした結果、経費削減による所得の向上が図られている。

（２）エゾバイの生態特性の解明による資源管理や増殖活動の実践

エゾバイに関する知見の少なさが資源回復の大きな課題であったが、釧路水産試験場と連携し生態特性を解明した。解明した生態特性に基づき、卵塊採取方法を改善し、放流数を増やすことが可能となった。また、禁漁区の設定、未成貝の漁獲防止の徹底など的確な資源管理対策や増殖活動を展開している。

（３）価格向上対策及び漁業所得の向上と後継者の増加

需要ニーズを調査し、出荷サイズ規制等の徹底により水揚金額が向上し、部会員の平均水揚金額が２倍以上まで拡大。さらに後継者も生まれ始めている。

・普及性と今後の発展方向

エゾバイは道東太平洋沿岸地域で漁獲されているが、部会の取組は周辺地域に波及しており、資源管理や増殖活動の広域的な展開が始まっている。また、部会の成果が基盤となって、持続可能なエゾバイ漁業の操業体制が広域で構築されつつある。

さらに、関係試験研究機関等と連携し、ガイドラインの策定に取り組んでいくこととしており、策定後は、道東太平洋沿岸全域で活用可能であり、極めて普及性が高く、地域漁業への貢献度が高い取組となる。

平成２７年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
むらづくり部門

消費者とのつながりにより歴史ある原風景を守るむらづくり

○集団等の名称　農事組合法人　南檜垣営農組合（代表　松井　義憲）

○所　　在　　地　奈良県天理市

○受　賞　理　由

・地域の沿革と概要

天理市は、奈良県北中部に位置している。南檜垣(みなみひがい)営農組合が活動している南檜垣地区は、同市の最南部に位置しており、南は桜井市、西は田原本町に接する田園地帯である。

南檜垣地区では、水稲、麦、大豆を中心とした農業が営まれるほか、県の認証ブランド「大和野菜ブランド」に認定されているさといも「味間(あじま)いも」などが栽培されている。

・むらづくり組織の概要

① 南檜垣地区では、転作による小麦栽培を集団化するため、平成14年に南檜垣麦作組合を結成した後、平成15年には小麦作業の受託組合として南檜垣営農組合(任意組織）を設立した。

② その後、品目横断的経営安定対策の導入と運営体制の整備のため、平成18年に農事組合法人南檜垣営農組合を組合員35名で発足し、現在では大豆栽培のほか、生活協同組合「コープ自然派奈良」との連携による商品開発、食育活動等を活発に行っている。

・むらづくりの取組概要

（１）農業生産面

① 生協と連携した商品開発として、消費者ニーズを踏まえて減農薬・減化学肥料で栽培した特別栽培米「大和ひみこ米」の販売を平成21年から開始しており、慣行栽培の米より高値で取引することで、農業経営の安定化に寄与している。

② 地元の業者と連携し、生産した大和ひみこ米や青大豆（アヤミドリ）を利用した味噌、豆乳等の商品化を行っている。特に味噌については、営農組合の女性グループが中心となって地元の直売所、奈良市のアンテナショップ等で販売されている。

（２）生活・環境整備面

① 地元の小学生を受け入れてサツマイモの定植や収穫体験を行うとともに、生協と連携し、組合員を対象とする水田での収穫体験、生き物調査、運動会等を実施しており、年間を通じて食育活動や消費者との交流活動を実施している。

② 地域の各家庭で作られていた味噌づくり教室を女性グループが中心となって実施するほか、水路やため池の維持管理等を非農家と共同で行うなど、地域コミュニティの維持と活性化に貢献している。

・他地域への普及性と今後の発展方向

営農組合は、ブランド米の確立、法人化やエコファーマーの取得、生産した作物の加工による高付加価値化等により安定的な農業経営を行い、地区の原風景を守りつつ、営農活動を越えた地域の結び付きに貢献しており、他地域への模範となり得るものである。